第 37 回　医学部所蔵の書「仕事をして死にたいのだ」

ここに東北大学医学部所蔵の「書」のなかにある掛額絵葉書三枚がある。医学部から送られてきた封筒には学部シンボルマークの北斗七星と創設 1872 年というロゴマークが描かれている。

絵葉書二葉は横書き掛額の写真で、ひとつには「鐵心」という揮毫で、昭和十五年春　本多光太郎とある。解説文には、「昭和 15 年に第 6 代総長・本多光太郎先生が医学部学生寄宿舎（平成 12 年 9 月 1 日焼失）に寄贈した扁額」と書かれている。本多光太郎博士は、冶金学・金属材料物性学の世界的権威で、KS 銅、新 KS 銅の発明者として知られ、東北大学金属材料研究所の初代所長であった。

もうひとつも横書き額で、「掬水月在手」辛亥暑日　利雄書と書かれている。それは「全唐詩」中の于良史の一句で、「池の水を手で掬って月を映した」という意味である。解説文には、東北大学第 10 代総長黒川利雄先生による「純粋な心で、私利私欲に走らず、世界を広く見て、正しい判断をしてほしい」との教えであると書かれてある。辛亥は干支（えと）のひとつで、ここでは 1971 年のことである。同じ干支が 60 年ごとに巡ってくるが、因みに 1971 年の 60 年前となる 1911 年には中国で清朝が倒された辛亥革命が起っている。この民主主義革命は、孫文が臨時大統領に就任して共和制を宣言したことで知られているが、革命にはかつて東北大学医学部の前身である仙台医学専門学校に学び、中途で退学して祖国に帰国した中国の文豪魯迅も関わっている。魯迅は帰国後革命運動から離れて、むしろ文学に専念し、1930 年中国に左翼作家同盟が設立されたときにはその中心的存在になった。現在中国では魯迅は革命や文学における歴史的巨星のひとりとして評価されている。「掬水月在手」を揮毫した黒川利雄博士は、内科学とくに胃癌診断学の発展に尽くし、日本で初めて胃癌の早期診断・早期発見を目指した集団検診を行った。本多・黒川両先生とも文化功労者であり、文化勲章を受賞されている。

三枚目の葉書写真の縦書きの扁額には、「仕事をして死にたいのだ　自分を変えるということはこんなにも難しいことなのか」と書かれている。それには似付はなく、作者も不明である。三枚の扁額写真のうち、はじめの二枚の文体や語感は筆者の記憶にあるそれぞれの作者の風貌に一致するが、三枚目の扁額の作者がどのような人物なのかは推測するほかない。

書かれた文書の字体は、なぐり書きに近い型にはまらない奔放なもので、全体から絵画のような趣も感じとられる。血がかきたてられるような、衝動的で、多少鬱屈しているような文面の語感から作者の若さが感じ取られ、書かれた年代は分からないが、作者は当時の医学部かどこか他の学部の学生ではないかと想像される。文書を直訳すると、「将来光芒を放つような仕事をすることに生涯の価値観を見いだした。そのためには先ず現実の自分というものを根本的に変えなければならないと考え、変えるように実行したができなかった」ということである。他人事にせず、自分自身に向けた若々しい無垢で求道的な言葉として印象的である。

自分を変えるということを考えるとき、まず思い浮かぶのは個体の心や精神を形成する気質や性格などを変えること、あるいは生活環境や生活習慣を変えることなどである。気質は、個人の性格の基礎になっている一般的感情傾向または性質のことであり、遺伝的・生物学的因子に強く支配されていると考えられている。それは古くはローマ時代のガノレスによる多血質・胆汁質・憂鬱質・粘液質の 4 型の分類が敷衍されて、今日の精神学や生物統計に用いられる気質分類の基礎になっている。人間の性格は、自分のおかれた状況のなかで、その個人の独特な行動と思考を規定するもので、正常状態にある個人では気質というものに強く関連する。気質も性格も個人の固有の「心」に通じるもので、本性・天性・天資などということ同様に、自分自身で変えようと試みても不可能である。

その作者が変えようとしたのは生活環境や生活習慣であったと思われるが、それらもまた変えることは難しい。

仕事をして死にたいとは、自然科学・社会科学・人文科学を問わず科学を勉学する者の多くが望んでいることであり、若い時からその思いを失わずに持続して前に進む努力をする者は、自分を変えようとしなくても、その終焉時までには満足できる結果が得られると思う。